

エギク ジャパニーズダンス プロダクツ代表

花柳衛菊(中村恵美子) 昭49被

花柳流に踊りの源泉を持ちながら、創作舞踊を国内外に発信しつづける花柳衛菊さん。その自由闊達な活動の奥底には伝統芸能への敬意とともに堅固な自立の精神がある。

日本舞踊との葛藤

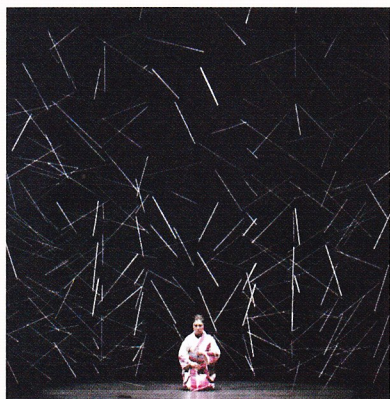
3歳から母(花柳衛吉)のもとで日本舞踊を始めた。当時、母は群舞で有名な舞踊団に属し、自宅の稽古場で教えていた。母の稽古は厳しく、逃れるように勉強に打ち込んだ。成績がよかったため周囲は兄や従妹たちと同じ医学部に進むものと考えていたようだが、男子が女子の3倍もいる都立新宿高校にいて逆に女でいることを常に意識させられることに辟易し、お茶大に進んだ。被服科を選んだのは、机上の勉強にあきあきし、体を使った技術や物を生み出すことに憧れていたから。将来を見越した卓越した選択だったと振り返る。

大学に入学してすぐ、母に無理やり連れていかれた名手・瀬川^{せがわせんじょ}仙女師の「山姥」を見て、日舞に対する思いに変革が起きた。師匠のちょっとした動作の中に、母の気持ち、女性のナイーブさとしなやかさ、深山の空気それらすべてが内蔵されていて、日本舞踊のたおやかさ、美しさ、奥深さに吸い込まれていった。そこから、踊りとの対峙が始まり、人間国宝の花柳寿南海師にも学んだ。

しかし実際に深く踏み入ると、日本舞踊界は血筋・地縁の世界であり、生まれたときからのスターがいる反面、家元の家に生まれなければどんなに技術を磨いてもお嬢さん芸の域から出られない。閉塞感から創作の道に進むことを決意し、モダンダンスの庄司裕師に作舞を学んだ。1985年、30代なかばに東京新聞主催全国舞踊コンクールの創作部門で優勝。それでも古典の伝承を目的とする日舞界に自分の居場所はほとんどなく、海外に活路を求めざるをえなかった。

海外公演への挑戦

まずは世界一の演劇祭と評判のエディンバラフェスティバル事務所



The American Architecture Prize 2017, in "Exhibition" of "Interior Design"を受賞した「平家物語を語り継ぐ」の舞台

所に手紙を書いたが、ロンドンでの説明会に出席するようにとの回答。20年以上も前、海外にひとりで行くなど想像もできず断念した。しかし数年後、エディンバラフェスティバルの冊子に掲載されていた日本人ダンサーにコンタクトをとり、1997年、初めての海外公演がかなう。以降毎年、ヨーロッパを中心に海外公演をおこなっている。

日本では古典を習い、做う。対して海外公演では

独創性をいかにアピールするかが重要である。各国のパフォーマーたちのなかで、自分の踊りは何かを見つめなおした。日舞で培われた技術すなわち緊張感をもちながら安定さを保つ緻密な動き、そして静寂から入り静寂を破り再び静寂に戻っていく日本の芸能文化が自分の軸であるが、それだけでは足りない。日本的な感性を大切にしつつ現代的な自分の感覚を信じ、日舞にはない「ひねり」や「上半身の大きな動き」を取り入れ、一つひとつの動作に数学的な美しいラインを追い求めている。

創作の範囲は音楽・衣装・踊る空間にも及ぶ。音楽は歌詞のない現代邦楽を使う。独特の旋律を奏でる現代邦楽は心にしみ入り、言葉がないので自由な感覚で解釈できる。豪華絢爛な衣装は使わず、母の代からつきあいのある職人さんに総柄の友禅の着物を注文したりもする。たくさんの職人さんたちの多彩な技の結晶は、着ているだけで豊かな気持ちになる。舞台は、シンプルだが4次元に自由に行き来できるような空間をデザイン。インテリアデザイナーの長男、中村和延氏がプロデュースし、2015年と2017年に国際的な賞をとった。

中学、高校教師として

大学4年の秋、日本舞踊家として本格的に活動するつもりで就職活動をしないでいると、大学の先生から私立女子校の非常勤家庭科講師の職を紹介され、65歳の定年まで勤めた。自ら紐衣、サリーなどを着てみせて服飾史を教えるなど劇場的授業を行い、知的好奇心旺盛の生徒たちを大いに沸かせた。

しかし定年5~6年前頃から、授業を楽しまず成績さえとればいいという生徒たちが増えてきた。また、同学年同授業同プリントとなり、教師が個人で創意工夫する授業はできなくなった。そこで「日本の伝統講座」と称して、授業中に5分間だけ手ぬぐいや風呂敷の面白い被り方などを教えた。

海外公演をとおして、日本人の育ててきた感性は非常に独自性が強く希少価値があることに気づいた。古くから伝承されてきた所作や型の美しさを伝え続けていきたい。

衛菊さんは毎年国内のリサイタル、海外フェスティバル参加公演などの個人活動にとどまらず、日本舞踊を広めたいという志を同じくする舞踊家たちと定期サロン公演「金曜赤坂座」を開催し、演目の世界観や背景も観客に伝えている。同会では2020年のオリンピックイヤーには訪日外国人が競技の合間に見られるような連続公演を企画中とのことだ。

(山崎 雅子)

おもな受賞歴・海外公演

1985年 東京新聞主催全国舞踊コンクール創作部門優勝 文部大臣奨励賞
1993年 平成5年度文化庁芸術祭賞
1997、1999、2000年 イギリス・エディンバラフェスティバル・フリンジ参加公演
2001年~2017年 フランス・アヴィニョン・フェスティバルオブ参加公演
ほか多数。詳しくは花柳衛菊氏のHP (www.egikuhayanayagi.com) をご覧ください。

近刊『学校で教える日本の伝統——着物文化から(仮)』(教育図書)